



2020年2月10日発行  
 特定非営利活動法人  
 盛岡YMCA  
 〒020-0015  
 盛岡市本町通 3-1-1  
 Tel 019-623-1575  
 Fax 019-623-1579  
 www.moriokaymca.org  
 発行人/ 塚塚 有史  
 編集/ 本部事務局

# YMCA News



## 子どものチャレンジを支える

SUSTAINABLE  
DEVELOPMENT  
GOALS



季節を巻き戻した夏の話。セミの声と、日差しが降り注ぐ山道。私の前を行く5歳の息子が振り返り、人さし指を口元にあてて私の動きを制します。息子は捕虫網の柄を長く持ちかえました。その視線は、枝先に止まるトンボを捉えています。黒地に黄のライン、映える緑の複眼。さながら小さなオニヤンマ。オナガサナエというレア種です。息子は忍び足で接近し、体が浮くほど背伸びをして網を振りました。しかし、オナガサナエに網がかかった瞬間、「あ〜!」、枝先が網に引っ掛かり振り切ることができませんでした。オナガサナエは、清々しいほど上空高く舞い上がりました。網は枝にぶらさがり、無念そうに揺れていました。息子は、力任せに網を引っ張りますが外れません。

私は、息子の肩に手を置き「惜しかった。また会えるといいな」と声をかけました。その肩からすっと力が抜けます。私が網を一度上に持ちあげ、枝先をかわして外し息子に手渡しました。息子は「父ちゃん、行くぞ!次は、オオルリボシヤンマ獲るぞ!」と坂を上り始めました。

子どもは、いつでもチャレンジします。首尾よく成し遂げたい、自分の力を存分に発揮したい、との思いがあります。その過程は、試行錯誤そのものであり、自己調整をしたり、安心安全を確かめたりしながら進もうとします。それに打ち込む子どもは、その時点での成功、失敗を問わず、よい顔をしています。この社会において、私たちは、子どものチャレンジを、その大小を問わず、確かに支え、思いを分かち合う大人でありたいと思います。私たちも、その道を通ってきましたね。

岩手大学准教授  
佐々木 全



## 盛岡 YMCA の使命

私たち、盛岡 YMCA は、イエス・キリストによって示された生き方に学びつつ、豊かな自然と歴史的伝統に満ちた岩手の地で、子ども、家族、地域とともに公正で平和な世界の実現を目指します。

1. 子どもたちの個性を大切にし、それぞれの夢や希望、生きる力を育みます。
2. 家族の絆といのちの大切さを深め合います。
3. 共に生きるために、異なった文化、多様な価値観と出会う場を提供します。



## ～ジュニアスキーキャンプ～

『スキーキャンプの「できた!」』

私は今回のジュニアスキーキャンプで、子どもたちの「できた!」の顔が強く印象に残っている。スキーレッスンは初級を担当したのだが、初めはスキー靴を履く段階から苦戦し、歩くので精一杯で、スキー板を履いて歩くだけでも転んでいた。しかし、2日名以降のレッスンでは、「できるかな」と不安な表情を浮かべながらも、リーダーの「開いてー!」の声を信じて足を開いて、それでも止まらずに転んで、また挑戦する、を繰り返して、中には「自分ではできると、自分に言い聞かせてから滑る子もいた。そうしていく中で、徐々に足を開けるようになり、止まりたいところで止まれるようになった瞬間、まっすぐ前を見ていた顔が私の方を向き、「できたね!」と言った私に、「できた!」と満面の笑みで答えてくれた瞬間は忘れられない。

レッスンを続けていく中でさらに上手になりたい、頑張りたいという思いが伝わってきて、この「できた、さらに上を目指そう」という気持ちは、とてもキラキラしていて素敵だと感じた。大学生になった今、出来るようになったという達成感を感じられる機会が少なくなってしまうているが、子どもたちとスキーを通して、できたという大きな喜びを感じ、共有することができたことがとても嬉しい。スキーというスポーツをする中で、靴を履けるようになる、止まれるようになる、曲がれるようになるなど、たくさんの目標があり、目標の達成に向かってたくさん挑戦するからこそ「できた!」という気持ちが大きくなるのだと思う。初めてのスキーキャンプだったが、スキーキャンプだからこそ見つけられるたくさんの「できた!」があると知り、その気持ちをたくさん分かち合うことができたので、スキーキャンプに参加することができて良かったと心から感じている。

岩手大学2年 佐藤亜美(はっちリーダー)



## ～ダイナミックスキーキャンプ～

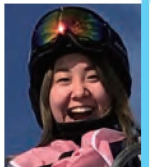
『ダイナミックなキャンプ』



2020年1月11日(土)～13日(日)にかけ、安比高原スキー場にてダイナミックスキーキャンプが行われました。子ども23名、リーダー・スタッフ13名の計36名でのダイナミックで楽しいキャンプとなりました。

今回のスキーキャンプのテーマは「ダイナミックなキャンプ」ということで、刺激的でパワーあふれるキャンプにしようと取り組みました。スキーレッスン前には雪合戦をしたり、フカフカの雪に飛び込んだりたくさん雪のあるスキー場ならではの環境を楽しみ、スキーレッスンが始まってからは、子どもたちから「もっと滑ろう!」「違うコースにも行ってみたい!」と元気いっばいの声が出て、1日1日を楽しみきりました。この3日間で私たちは、新しい友達に出会い、仲を深め、楽しいキャンプをすることが出来ました。スキーキャンプのテーマであった「ダイナミックなキャンプ」のように、すべての時間が、刺激的で、記憶に鮮明に残る思い出になったと思います。子どもたちと一緒にスキーしたこと、お風呂に入ったこと、ナイトプログラムをしたこと、全てが私にとって、大切な、大切な思い出です。一生忘れない思い出はこれから先、自分にとって宝物になり、財産になります。子どもたちにとってもこのキャンプが、将来思い出した時に笑顔になれる思い出となっていたら嬉しいです。

またこのスキーキャンプだけでなく、日常生活からそのような思い出をたくさん作って欲しいと思います。次はどんな子どもたちに出会って、どんなキャンプになっていくのか、考えただけでワクワクが止まりません。



岩手県立大学1年 横山日向子(てらりリーダー)



## ～日帰りスキー～

『日帰りスキーだからこそ発見できたこと』

盛岡YMCAに入って、およそ1年が経った。YMCAという団体、子どもたちとの関わり方等、この1年で得たものは本当に様々だった。しかし、何度、YMCAの活動に参加しても、そのたびに新鮮な感覚を得ることのできることもある。それは、子どもたちの底知れぬエネルギーの大きさだ。もちろん、元気いっばいという意味も含まれるのだが、この魅力というのはそこだけではない。子どもたちは大人のような中途半端な妥協はしない、そこが本当の魅力だと私は思う。朝9時前、スキーをすること、もしくは仲のいい友達と会えることに胸を躍らせた子どもたちの顔が見えた。そんな彼らの顔を見てしまったからには私ももう嬉しくてたまらない。そして、2020年日帰りスキー教室は始まった。

スキーのレベルに合わせて、グループごとに滑る。彼らは冬限定のこのスポーツにとにかく夢中だ。とはいっても、やはりスキー、重い板、滑る際のテクニックが徐々に子どもたちの体力や、やる気を奪っていく。理想とする滑りができなかつたり、疲れがでたりで暗くなってしまう子もいた。さっきまでの明るい表情は一転、暗い雰囲気。「もういい!」、そんな諦めた声も。でも何とかやる気を取り戻して、次のリフトに乗ったらけろっと笑う。本当に彼らは表情の変化が激しい。でも、これは何事にも妥協しない彼らの、彼らの時期にしかできないことなのではないかと感じた。子どもたちのスキーはただ楽しく滑るスキーではない、滑るんだっつらとどこか滑るし不満に思うことがあったら迷わず吐き出す。

日帰りスキーだからこそ、子どもたちも必死に滑ろうとする。限られた時間の中で、その時間を最も大事にしようとしているのは、やはり子どもたちだ。何にでも全力で、そんな姿勢を改めて私は学んだ。そして、そんな子どもたちと関わる私たちは、その気持ちを一番に理解し支えていこうと改めて思うことができた。

岩手大学1年 小河原悠加(ぶんちんリーダー)



## 埼玉スキーキャンプ報告

私は今回のキャンプの話聞いた頃、未だにリーダーとは何かよくわかっていなかった。活動にたくさん参加しているわけでもなく、夏のキャンプに参加もしていない。だからこそ、子どもたちと上手にかかわっている他のリーダーが、とてもキラキラして見えていた。そんな時に埼玉へのスキーキャンプのお誘いが来て、「行ってみたい」と思い、行くことに決めた。

私は5人の生活グループと6人のスキーグループをもった。知らない場所で、経験のない私がちゃんと役割を務められるか不安もあったが、埼玉に行ってから、やるしかないという気持ちでキャンプを楽しむことにした。

子どもたちは、会ったことのない私にも元気にたくさん話しかけてくれた。私は緊張を感じる暇もないくらいに楽しみながら、子どもたちと関わることができた。3泊4日は本当にあっという間に過ぎた。子どもたちの安全を確認したり、どうしたら楽しんでもらえるのかを考えたりする自分の姿は、リーダーとしての一歩を、やっと踏み出せた気がしてとても嬉しく感じた。

3泊4日のキャンプを通して感じたことは、子どもたちのエネルギーは無限大だということだ。私をもった年長と小1の男の子グループは今回のグループで最年少のグループだったが、日が経つにつれてどんどん元気が増してきて、底なしの体力を感じることもできた。

それと共に、私が最後まで頑張ることができたのは、子どもたちの笑顔があったからである。私は子どもたちを楽しませることを考えていたが、実際のキャンプでは私が子どもたちから元気をもらって楽しさを与えてもらっていたのである。

いつの間にかキャンプに対する不安は消え、最高の思い出を埼玉で作ることができた。優しくあたたかく迎えてくれた埼玉YMCAのみんなに感謝している。正しいリーダーの姿はまだ見つけられていないが、これから盛岡YMCAのリーダーとして思いっきり楽しく活動していきたい。

岩手県立大学1年 長田瑠唯(パンジー)



## サッカー合宿報告

2020年1月7日～10日までの3泊4日、盛岡YMCAベストキッズはサッカー合宿に行ってきました。今年は人数が少なく、12名での活動となりましたが、その分コミュニケーションも密に取り合いながらの合宿となったと思います。

午前午後でそれぞれ3時間ずつ、4日間で計18時間にも及ぶトレーニングをしてきました。トレーニングは決して楽なものではありませんでしたが、一つ一つの練習で自分が何を身に付けたいのか、何を意識するのか、どう修正したら出来ないことが出来るようになるのかを考え、分かなければ仲間と聞きながら取り組んでいる姿も見られました。

サッカーのトレーニング以外でも、夜にミーティングを行い、サッカーノートの書き方、サッカーの楽しさについて、自覚するとはどういうことか等、気持ちや頭も作れるようみんなで考えてきました。

今回の合宿では、サッカーの時のスイッチとそれ以外のスイッチとで、切り替えをはっきりしようということにも取り組み、まだ100点とはいきませんが、少し意識できるようになってきたと思います。

食事で苦しんだり、トレーニングで苦しんだりしながらも仲間を支え、仲間を支えられて無事に4日間をやりきることができました。現在、盛岡YMCAベストキッズは人数が多いほうではありませんが、これまでの中でもサッカーが大好きなメンバーが集まっています。今回の合宿が第一

歩となり、お互いで高めあい、サッカーでも生活面でも盛岡YMCAの代表であるという自覚をもって行動できるよう、人間として大きくなってほしいと思います。

今後は3月にも合宿が予定されています。この冬期間のトレーニングに耐え、サッカーと本気で向き合ったベストキッズが4月以降どうなっていくのか楽しみに、これからも進化し続けていきたいと思っています。

盛岡YMCAベストキッズ監督 向平悟



## YMCA農村青年塾

「桃の切り方が分からない!？」昨年、盛岡YMCAの数名のボランティアリーダーを連れて、福島の地を訪れた。その時に泊まらせていただいた勝縁寺で、夕食の準備をしていると、住職が福島のおいしい桃を持ってきて下さった。とても喜んでいたら、「切っておいてちょうだいね。」私はそう言って、別の作業をしにキッチンに後にした。なかなか桃がこないため、再びキッチンに戻ると、桃を見つめてあれこれと話しているリーダーの姿があった。まさか私が、桃の切り方を大学生に教えるなんて、とても驚いた。

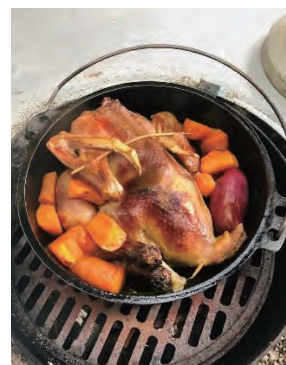
こんなことを、1月17日～19日の3日間、東山荘で行われたYMCA農村青年塾に参加させていただく中で思い返していた。私自身、農村について、農業について、全くと言って良いほど無知だった。だからこそ、現在山奥で農業を営む方々と出会い、普段の世界とはまるで別世界に生きる人達からたくさんの刺激を、「生きる力」「たくましさ」をいただいた。その中で、農業は人の生き方を改めて考えさせてくれるということ強く感じた。

農業を学ぶことで、自分の生き方を振り返ることができる。人参はどのように育ち、どれくらいの時間がかかるのか、どのような環境で育つのか、また、いつもスーパーに並ぶ豚肉は、誰が育て、どんなものを食べて育った豚なのか、どこから出荷されたのか…。食べ物だけではない。捻った蛇口はどこから来る水なのか、ストーブの燃料はどこからくるのか…。

いつも何不自由なく生活をしているひとつひとつの当たり前環境に、一度立ち止まることがとても大切だと感じた。食べる物、生活環境は私自身そのものに全て還元される。

まずは知り学ぶこと、そこから食べる物が変わり、生活環境が変わり、「生き方」が変わってくる。この研修で終わらず、学ぶことから始めていこうと思う。

盛岡YMCAスタッフ 武田悠



②参加された方々の畑で育てている野菜と合鴨



①持ち寄った餅米を蒸している写真



## ※ポジティブネット⑬

### 読解力

「どんなに私たちが人生に絶望しても人生が私たちに絶望することはない」オーストリアの精神科医ヴィクトール・フランクルは、自らナチスの強制収容所で味わった過酷な体験を「夜と霧」という一冊の本に綴った。

読書の魅力はどこにあるのだろうか。ある作家はこう語っている。「他者の書いた物語の中に自分の苦しみ書き込まれているように感じられることがある。その時、人は物語にやさしく迎え入れられている。自分の苦悩や痛みを物語と一緒に耐えてくれる。だからこそ心に余白が生まれ、自分の人生から少しだけ距離を置いて周囲を見渡すことができる。」

「AI vs 教科書が読めないこどもたち」という本が30万部のベストセラーになっている。人工知能プロジェクトのリーダーである著者は、AIが人間の仕事をすべて肩代わりする未来はやってこないと言いつつ、近い将来ホワイトカラーの多くの職種がAIに代替されるだろうと予測している。鍵を握るのはAIにはできない、ものごとの本当の意味を理解する読解力だそうだ。

ほんの数年前までは、速読の技術がもてはやされ、どれだけ多くの本を読んでいるか、知識を情報としてストックしているかが重要だと言われていた。ところがそのような能力こそAIが最も得意とするものである。1冊の本を前にして立ち止まる読書。そこに自己を照らし合わせ、深く時と場所を越えて作者と対話していく読解力が混沌として先が見えない時代だからこそ大切なのでは？

「こうして、イザヤの告げた預言が彼らの上に実現するのである。『あなたがたは聞くには聞くが、決して悟らず見るには見るが決して認めない。この民の心は鈍り耳は遠くなり目は閉じている、目で見ず、耳で聞かず心で悟らず、立ち帰って私に癒やされることのないためである。』

(マタイによる福音書13章14～15節)

盛岡YMCA 総主事 濱塚有史

※互いの存在や個性を認め合い、高め合うことのできる、善意や前向きな気持ちによってつながるネットワークのこと

## インドでビリケン・マックスが考えた⑨



ちょうど去年の今頃は、インド・スタディキャンプに向けての準備を、せっせと行っていました。毎週予防接種を打ちに行ったり、大きいリュックなどといった準備物を購入しに行ったり...

先日、私たちキャンパーの引率をしてくださったケンティーが、盛岡YMCAを訪ねてくれました。帰国後、初めて会ったので約1年ぶりの再会です。ケンティーとマックスと私で、インド・スタディキャンプの思い出を語り合いました。「最初はどうかと思ったね」と思いつつ話している中で、他人と自分とを受け入れ合うということについて、考えさせられました。

インド・スタディキャンプでは様々な出会いがありました。インドのYMCAで地域を活性化させていた方々、インドの孤児たちを支援しているスレッシュさん。そして、常に共に生活をしたキャンパーたち。

キャンパーはそれぞれ、所属も年齢も違い、出国の1か月前に初めて顔を合わせたメンバーでした。インドでの生活の当初は、違いを認め受け入れなきゃという義務感が私の中にあっただけです。だから、ただでさえ英語は苦手なのに、インド英語という癖の強い英語での講義につまずき、他の英語で質問をしていたキャンパーとの違いに焦りを感じていました。

しかし、生活を共にしていく中で、意外な一面に触れたり、自分の事を受け入れてくれているのだと感じる瞬間があったりする中で、キャンプの終盤には、英語が得意なキャンパーに頼ることが容易に出来るようになり、相手も、聞く前から教えてくれるようになっていました。きっと違いを認めて受け入れたから、この相互の関係が出来たのだと思います。人と人との規模だけでなく、もっと大きな規模でも違いを超えて認め合う、受け入れるということが出来ると、暖かな社会が築けるのだろうなと思います。

インド・スタディキャンプに行くにあたり、支えて下さった皆さんに感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

岩手大学4年  
尾河芽生(ビリケン)



### 感謝

2020年1月27日現在 敬称略

#### ●維持委員

伊藤真太郎、伊藤愛美、晴山浩輔、工藤悦子、今野聖子、花田暉一、戸貝文、鶴丹谷三子、中島敬泰、家村知佳、押切祥、名古屋理恵、増田隆川、坂保宏、伊藤信彦、大関靖二、南原良哉、伊藤真一郎、伊藤まど、高瀬稔彦、田村治之、遠藤昌樹、尾張幸久、飯島隆輔、林辰也、魚住恵、今松桂子、熊谷大樹、森山日菜乃、森山幹大、光永尚生、北田仁則、北田アズ子、東森聡、人見晃弘、尾形裕一郎、山口貴伸、井上修三、井上優子、井上浩太郎、長岡正彦、高橋友恵、水田賢次、澤田優美、平泉幸子、佐々木理香、藤原祐三、浅沼恵、浅沼美希、若井淳、及川茂夫、阿部深雪、上中優奈、植田二茂、松尾聡子、武田理恵子、佐藤洋一、菊地弘生、重石佳司、acorn、日、熊谷咲希、日語教員、滝川裕子、浅沼誠久、高橋奈菜、水野暢夫、濱塚秋二、濱塚れい子、濱塚有史、濱塚真美、佐藤翔、古澤伸、向平悟、ちひろ、小川嘉文、濱塚直樹、赤子小川明佑、廣川健太郎、廣川厚子、廣川はるな、野澤朋華、魚住英昭、尾張幸久、大久保里美、中村圭一、菅原歩、武田悠、釜澤亮、齊藤優太、布引和生、ガイアリンク(株)、角谷晋次、神田橋慧一、中原真澄、小林茂元、齋藤之彦、清水治彦、小林明彦、大塚英彦

#### ●寄附金

晴山浩輔、工藤悦子、今野聖子、今野聖子、家村知佳、南原良哉、伊藤真一郎、伊藤まど、田村治之、遠藤昌樹、尾張幸久、今松桂子、熊谷大樹、光永尚生、人見晃弘、及川茂夫、菊地弘生、日語教員、尾張幸久、ガイアリンク(株)、角谷晋次、武田理恵子

### 表紙の写真から



年末に開催された「スキーキャンプ・リーダートレーニング」の様子。盛岡YMCAのスキーのゼッケンの色はピンク。2月に開催される。ピンクシャツデーを意識して作成しています。

最新情報はこちらでチェックできます！「盛岡YMCA」で検索ください。

ホームページ : <https://www.moriokaymca.org/>

facebook : <https://ja-jp.facebook.com/moriokaymca/>